●自著を語る ●――● BOOK

『道徳教育の取扱説明書 ― 教科化の必要性を考える』

学術出版会 1890円
☎03-3947-9153

武蔵野大学教授
貝塚 茂樹/*Shigeki Kaizuka*

file
1963年茨城県生まれ。1993年筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。国立教育政策研究所主任研究官などを経て、現在、武蔵野大学教授。博士(教育学)。専門は日本教育史・道徳教育論。

子どもの心に向き合うために道徳を教科へ

何を学んだか覚えていない

大学生に「小中学校の道徳の時間でどんなことを勉強したか」と尋ねると半数の学生は答えられません。覚えていないケースもあります。文科省の調査では小学校で約8割、中学校で約7割が週1時間実施しているにもかかわらず、子どもたちの印象に残っていない。これは道徳教育がさまざまな意味で形式化していることを示しています。

モラルや価値の教育についてこれほど揺らいでいるのは日本だけではないでしょうか。欧米では、宗教的背景から価値教育は家庭でという考えがありますし、そうでない国は、学校で何らかの価値教育を行っています。

子どもたちの規範意識の低下が叫ばれている今、日本ではそれらを「道徳教育の問題としてどう引き受けるのか」という議論に発展していないのです。

タブーから議論の俎上(そじょう)へ

「生活指導の中で価値教育は十分にできる」「価値を教えることは国家主義につながるから危険だ」という見方もあるでしょう。でも道徳の時間を活性化せずに、そうした主張をするのは子どもたちの心の問題を解決することになりません。

道徳教育という言葉の持つ「タブー感」を打破し、カリキュラムの中に価値教育としての教科を位置付けるべきと提言したのが本書です。

戦後約60年の間に、明治期からの日本の道徳教育に関する研究が枯渇してしまったのは、深刻な問題です。今回の学習指導要領で「道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う」と明記されたことは、道徳教育を議論のまな板の上に載せるという意味でも重要です。

なぜいじめてはいけないか

人間は1人では生きていけないこと、他者との関わりが必要なことを伝えていくのが道徳教育です。

「相手には正直であった方がよい」「他者にはうそをつかず、誠実に」という知恵は人間が歴史の中で得てきたもので、その考えと方法を集約したものが価値であり、戦前の修身科でもそれを教えていたのです。しかし、価値を踏まえながら日常生活の中で私たちがどう行動していくかという「判断力の育成」については不十分でした。

今日の道徳教育に求められているのは、何を基準にそうするのかという「価値」をしっかり伝え、判断力や問題解決力を育てていくことではないでしょうか。

いじめがあったときに子どもを指導したり、子ども同士で話し合わせたりしていますね。そこに、「人が人をいじめるとはどういうことか」という根本的な意味を考える時間が加われば、日常の生徒指導はもっと生きてくるはずなのです。

子どもの発達段階に合わせて道徳的な価値を理論的に教え考えていく場が、今こそ求められているのです。